

Title	パネルセッション1: オンライン教育が大学をどう変える?
Sub Title	
Author	大川, 恵子(Ōkawa, Keiko) 森, 秀樹(Mori, Hideki) 藤本, 徹(Fujimoto, Tōru) 重野, 寛(Shigeno, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC review Keio University). Vol.7, No.1 (2020. 3) ,p.42- 57
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 DMC研究センターシンポジウム第9回「大学教育のミライ : オープンエデュケーションのその先へ」これからのMOOCの話しよう 開催日時 : 2019年11月20日 (水) 14:00~19:00 開催場所 : 慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎2F大会議室
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000007-0042

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

パネルセッション 1

「オンライン教育が大学をどう変える？」

[パネリスト]

大川 恵子 (慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科教授/DMC 研究センター副所長)

森 秀樹 (東京工業大学教育革新センター准教授)

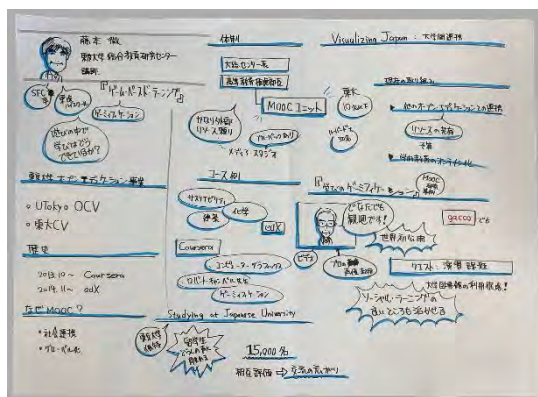
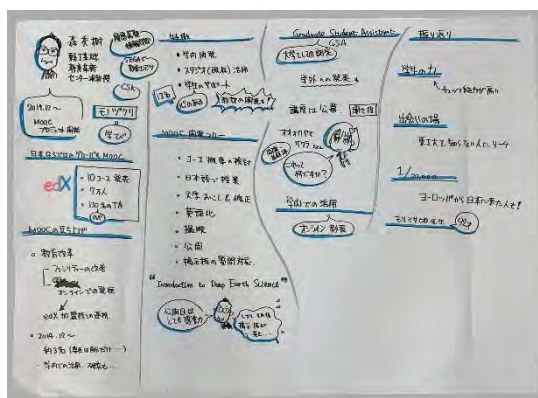
藤本 徹 (東京大学大学院情報学環講師/
大学総合教育研究センター講師)

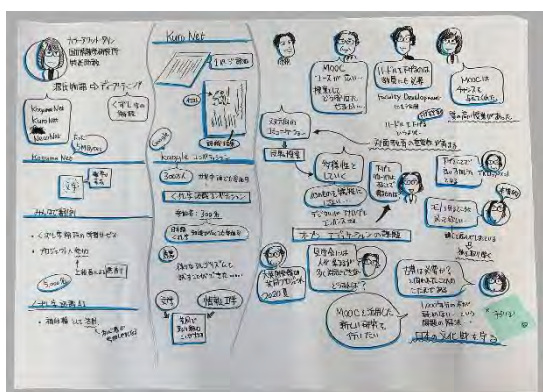
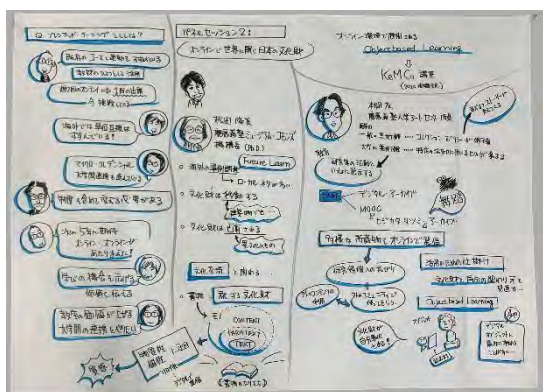
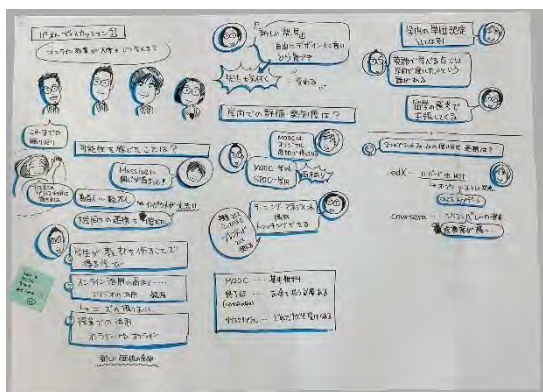
[モデレータ]

重野 寛 (慶應義塾大学理工学部教授/
DMC 研究センター所長)

重野: それではまず講師の皆さん、ご講演ありがとうございました。ここからはパネルセッション『オンライン教育が大学をどう変える?』ということをお送りしたいと思います。残念なことに、斯道文庫の佐々木孝浩先生はご都合によって参加できないということです。

少し休憩をいただきましたので、全体を振り返ることも兼ねて、ちょうど楽描人(らくがきじん)カエルンさんが書いてくださった、非常に素晴らしいグラフィック・レコードがございます。急遽お願いして、こちら正面でのスクリーンでも表示していただきました。私の絵も描いていただきまして、先ほど横に並んで記念撮影をさせていただきました。





(C) 2019 @ujisakaeru

佐々木先生からは、非常にフレッシュな感じで、慶應義塾で第1号のコースを作ったときのライブ感やリアルな感じをお話くださり、「ああ、こんなふうになられたのだな」ということがわかる講演をいただきました。

それから2番目の東工大の森先生からは、東工大の5年間の取り組みやその内容につ

いてお話しいただきました。TokyoTechX、既に配信されている10コースについても、いろいろなご経験についてご披露いただきました。やはり、最初のコースが生みの苦しみと、大変だったという思いもあり、印象に残られているということでした。大変、面白いと思ったことの一つとして、学内をどうやって巻き込んでいくかということに非常に進んだ取り組みをされていて、コースの提供をされる先生方を学内公募で選ばれていたり、学生さんがTAとしてお手伝いをしていたりしています。さらにオーガナイズされて、これにサーティフィケートを出すような形で加わっているということで、学内的な着地といえますか、プロモーション、巻き込み方に関して、非常に進んだ取り組みをされていると思いながら、拝聴いたしました。もちろん他にもいろいろなこととお話しいただきましたが、個人的にピンポイントで引っ掛かったところを、少しご紹介させていただきました。





重野先生

それから、東京大学大学院藤本先生からは東大での取り組みについてご講演をいただきました。東工大や慶應とも全く異なるアプローチで、進めていらっしゃる、最初は国際広報的な取り組みや、社会貢献的な取り組みとして始まったということで、それをどうやって学内に収めていくかというその課題感は、われわれにも共通するところだと思います。早くから取り組んでおられますので、教育コンテンツを提供して、学生さんを集めて教育しましたというレベルから、もう一歩も二歩も、先に進んでいらっしゃると思います。例えば大学間の連携に進んでおられる点、相互評価のレポートを可視化されて、さらに留学したい人向けの教育コンテンツを提供したりする点など、これまでのコンテンツとはまた違った形の新しいオンライン教育ならではのコンテンツ、日本ならではの新しいコンテンツに取り組まれており、大変興味深く拝聴いたしました。そして最後には、ゲーミフィケーションの取り組みということで、科研費をとら

れて、いわゆる研究としても展開をされているということですので、大学ならではの在り方のようなことを、大変、勉強させていただいたと思います。さて、ざっくり振り返りをさせていただきました。このグラフィック・レコードを表示してくださったスタッフの方、ありがとうございます。

少しざっくばらんに進めていきたいと考えていますが、私からリードをして、最初にご質問を幾つかさせていただきたいと思えます。まず、お三方の経験の中で、恐らく何らかのきっかけがあって、こういうことに関わられたと思うのですが、新しいオンライン教育をやってみたり、コースを出してみたりすることによって、何か新しい価値といいますか、やっていてよかったという個人的な達成感、これは何か新しい可能性があるのではないかというようなことを、感じた瞬間があったのではないかと思います。そのようなことに関して、少しご披露していただけないかと思っております。それは、教育的なものかもしれませんが、あるいは教育の形のようなことかもしれませんが、あるいは意外とこれまでのものと同じだなと感じたり、逆に違うなと感じたりするかもしれません。そのようなことを少しお話いただけないかと思うのですが、いかがでしょうか。

藤本：この MOOC 事業が始まって、最初の頃は、やはり大規模 (Massive) であることが非常に関心を集めたのです。1 コースに 10 万人とか何十万人単位で受講生が集まりますし、佐々木先生もおっしゃっていましたが、今までにないようなフィードバックを教員が受けるという体験をされました。それによって、皆さん今まで教えてきた中で、このような体験をしたことは初めてだと、先生方は口々におっしゃります。それは現在も同じで、規模としては、1 コース当たりの受講者という観点でいうと、だいぶ少なくともはなっているのですが、それでもやはり大学の中の閉じた大教室の授業で 300 人を相手にするのは全く違う規模の学生と触れることができます。しかも慶應なら日吉や三田、あるいは東大の本郷に来られない人でも、世界中から集まっているというインパクトは、やはり大きかったと思います。それによって大学のそれまでやっていたオープンエデュケーションの授業は、まだ大学の枠の中でやっていたものが、枠の外で、そもそもそのプラットフォームを大学が提供していないところでやっていますし、そのプラットフォームに参加する大学同士の連合が起きたというのも、この 5 年ぐらいの大きな変化であります。そういう今まで補完的な位置付けで、オンライン教育を行っていたのが、補完で

はなくなったという点が大きな変換であると思います。



藤本先生

重野：ありがとうございます。森先生、いかがでしょうか。

森：そうですね、私自身はものづくりを通じて、人がどう学ぶかということに興味があるので、どうしてもそこに戻ってしまうのですが、やはり学生がオンライン教材を作るということは、非常に価値のある、面白い学びの場だと感じています。つまり自分たちの作ったものが、世界に向けて発信されて、ある意味さらされるわけです。オンライン教材のいいところは、作り直すことができますから、何度でも作り直して試しながら、自分たちが納得いく形で、また直していくという作業に入るわけです。できるという意味では、実はオンライン教材を作ること、特にいわゆるフューチャーファカルティプログラムですが、これから大学教員を目指す学生にとっては、貴重な経

験になるのではないかと感じているところ
です。



森先生

もう1点は、その新しい価値としてMOOC
を始めてから、もちろんOCWがあつて、
MOOCがあつてという流れもございますが、
学内でもやはり急速にオンラインを活用し
ようという動きができてきたことです。具
体的に言いますと、スタジオもあり、撮影
もできるのなら、今まで普通に教室で倫理
教育をやっていたけれども、録画して見て
もらうようにスタジオできれいに撮ってみ
ようという話になったり、それは情報セキ
ュリティーの講座だったり、学生の留学前
の安全講習だったりします。学内でオンラ
イン教育を使ってみたい、試してみたいと
いうニーズが掘り起こせたことも大きいと
思います。

また、今、進んでいるところでは、授業
でのオンライン教材の活用です。MOOCで作
ったものを、今、実際に1年生が、電気電
子の授業で全員受講しています。いわゆる
授業前の教材として活用しています。それ

に伴って、今、学内では、そのオンライン
で受けた授業を、どう時間として認めるか
というような議論も広がってきています。
そういう意味では、MOOCからさらに広くオ
ンライン教育について、学内に新しい価値
が少しずつできてきているのではないかと
思います。

重野：大川先生いかがですか。



大川先生

大川：そうですね。私もまず一つ目は、
FutureLearnはソーシャルラーニングであ
りますが、その三つのフィロソフィーのよ
うに、教育理念に対してのドライブが強い
タイプのプラットフォームなのです。ニュ
ートラルなプラットフォームもあるし、結
構強いタイプのプラットフォームもあつて、
私たちは結構強いタイプでやってきたので
すが、それが私にとっては、新しい発見も
たくさんあつて、とても面白かったのです。
私はそもそも、どちらかといえば、コミュ
ニケーションやテクノロジーがバックグラ

ウンドで、教育にバックグラウンドがありませんので、こういうフィロソフィーに沿って、自由にデザインしていいよということがすごく楽しかったのです。今回少ワークショップもやりましたが、1 時間半、教室で話すということを前提とした授業ではなく、どうやったら伝わるかということ積み上げていくことでデザインできるということが非常に面白いと思いました。

そしてそれは、私が面白かただけではなく、それをワークショップで先生とやったときに、先生が完全にパラダイムシフトしてくれて、先生も、「これファカルティディベロップメントにいいね」と言ってくださったのです。つまり、学ぶとか、教えるとかというパラダイムが、本当にシフトしてくれるのではないかと思った瞬間が、私にはうれしかったのです。特に、最初、「先生、この授業をオンラインでやりましょう」と言ったときに、先生が「15 回こういうふうにやろうと思います」といってくのを、私がガッと変えてしまうところが、楽しいなと思いました。

重野：はい、ありがとうございます。期せずして森先生と大川先生は、それぞれに少しこれまでとは違うご経験があるように思いました。また、藤本先生から学生のフィードバックが世界からある、マッシブであることがこれまでとは違い、大学を飛び出

しているという感覚でしょうか、あるいは、大学の教育の在り方から飛び出しているという感じでしょうか、やはり MOOC の世界から見えてくるところがあるのではないかというお話を伺いました。

そして、私からお伺いしたいと思っているのは、まさに学内についてです。活用が始まっているというお話をそれぞれいただいています。それから学外に飛び立っているというお話もいただいています、やはり大学でやっていることですので、学内でどのように評価をされているのかということをお伺いしたいと思います。生々しい話になると思いますが、例えば教員の方の認知度や、学生さんの認知度などというものあるかと思うのです。東大ではそもそもあった授業を、オンライン化するところから始められたと説明いただいたと思うのです。そういう意味では最初から授業で使うというようなことがベースラインにあったのでしょうか。

藤本：そこは若干、補足が必要でして、オープンコースウェアは、正規授業をそのまま収録して公開する取り組みです。MOOC は新たにオンラインコースとして作りますので、担当の先生からすると追加の負担を伴う活動となります。担当授業とは別に追加でやらなければならないので、負担が大きい。そうすると引き受けるには、少しハー

ドルが高いと感じる先生や躊躇される先生も多いです。東大は方針として英語の授業を配信するというをやっていますので、英語で授業ができて、新しい授業を追加で提供できるという方は、限られるのが現状です。

重野：東工大の場合には、募集をされて今、作っているということですが、これは正規の授業とはやはり別のアディショナルな形になるのですか。それともご自身がやっている、普段の講義をオンライン化してほしいというような応募が多いのでしょうか。

森：基本的には MOOC で出したいものと、SPOC として学内利用したいものとの両方を公募しております。ですので、先生方によっては学内、自分の授業で使いたいという応募もいただきますし、MOOC として出したいという応募もいただいています。数としては、一昨年が 4 件です。今年はまだ受け付けているような状態でございまして、これからもう少し認知度を上げていかなければならないというところでございます。

重野：ありがとうございます。それでは大川先生からも慶應の状況を一言お願いします。

大川：認知度を上げていかなければいけないというのもあるのですが、今、SPOC のお

話が出たので、学内でどう使われているかお話しします。Quantum Computers のコースについては、世界中で一緒に学びながらレジスタした学生だけは、SPOC のようにトラックができる機能があって、教室受講者はそのスペシャルなレジストレーションをしながら、一緒に学ぶということをやっています。これはラーニングマネージャー機能というものなのですが、そうすると教室の学生は誰がどこまでやったのかというのを、先生が個人特定しながらモニターできるのです。でも、プライベートではなく、コメントはもう世界中でやるということをやっていて、これはかなり面白いです。授業の中でも、もう 2 年やっていますが、やっていなかったときよりも、学生の理解度はとても上がって、かつブレンディッドになりますから、授業の中では実習中心のようなことができるようになってきたというコメントをいただいています。そういう無理のないやり方で、ブレンディッドを使っていくというのは、コースによってはありなのではないかと思います。

重野：はい、ありがとうございます。先ほどお休みの間に、少しご質問をいただいたのですが、私の知識の確認も兼ねてお聞きします。ここで言っている MOOC の講義を発信しますというお話は、受講者の方々か

ら見ると、それぞれのプラットフォームに受講者は学生として登録をして、授業を受けるということで、オンラインの配信を受けるのは、基本的には無料で自由に受けることができるという理解でよろしいでしょうか？ ただそれですと、受けたことで終わってしまうということになってしまいます。大川先生の話ではサーティフィケートという、有料で出しているもののお話がありました。プラットフォームによって少し言い方が違うようですが、いわゆる受講が完了しましたという、終了証を出すところまでは、どのプラットフォームでもやっているかと思うのですが、そういう理解でよろしいでしょうか。

大川：そうですね、FutureLearn も有料で、お金を払うとサーティフィケートがゲットできるという状況になっています。最近はサブスクリプションモデルが主流になりつつあって、1年間いくらかでどんなコースでも受けられます。有料会員というか、有料ユーザーとして受けられるので、どんどん学ぶと少し得をすることになるので、そういうのはいいなと最近思っています。

重野：質問された方はサーティフィケートを取りましたとおっしゃっていましたが、授業終了や完了したときに、大学の中ではどういう扱いになっているのかというのを

教えていただけますか？ 例えばサーティフィケートを取ったことと、単位が取れたということは、大学の中では、おそらく独立したことだと思うのですが、場合によっては単位として認定しますということもあるかと思うのです。その辺の扱いがどのようになっているのかを、教えていただけますか。いかがでしょうか。



藤本：まず東大は、開始当初から、学内の単位認定と結び付けてしまうと、制度的に非常にややこしいことになってしまうので、結びつけておりません。学内の教務委員会などで、そのための調整をしていると、MOOCは何年たっても作ることができなくなってしまいます。そういうわけで、MOOCの修了証は、公開講座のような位置付けで、学内の単位認定とは別個の取り組みとして始めました。それは現在も変わっておらず、修了した方は、東大の提供しているMOOCを修了しましたという証しとして、修了証を有料で発行してもらえます。あのコースを受講してくれたのかと認識されることは

あるかと思いますが、制度的には単位として認定されていません。



森先生

森：東工大も、今のところは、MOOCの修了証を単位として認めるということをやっていません。ただ、MOOCを立ち上げた理由の一つが、先ほど話すのを忘れておりましたが、学内で学生が英語で学べる環境を作るということで、実は大学院の授業を全て英語にするという目標を立てています。ですので、そういった意味では、これから先生方のニーズとしても、実は、MOOCにたくさんのコースがあって、英語で学べるものがあったら使いたいというようなお話をいただいている、今、検討しているというような段階でございます。

重野：ありがとうございます。大川先生コメントはございますか。

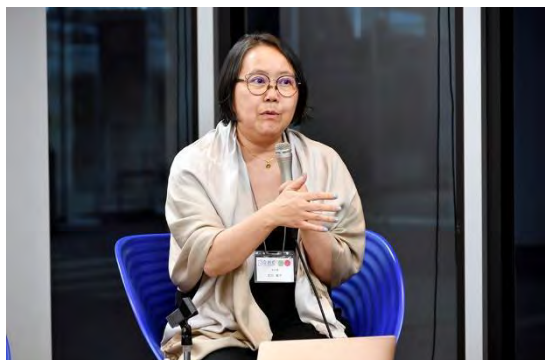
大川：はい、慶應も単位とは無関係に動いております。ただ、慶應の学生がというわけではないのですが、学生のほうは、サーティフィケートを取ったということ、か

なり真剣に主張してきます。edXでは、「大学では学ばなかったのですが、私はもうedXで経済学をきちんと学んで、edXからこの修了証をもらったので、私をきちんと経済を学んだことにしてください」というようなことを普通に言ってくる。例えば、留学の選考のときなどですが、やはり学生の捉え方は随分違ってきました。

重野：これはある意味、今日のテーマからするとあまり面白くない質問をしているとも言えそうです。それは、今の大学の制度とどうつながっているのですかという視点ですので、必ずしも明るい未来に焦点を当てていないからです。実感としては、非常にいろいろな可能性がある取り組みであるし、プラットフォームではあるのですが、大学の中でどう着地するのかということに関して、まだ課題がたくさんあります。その一つは、学生さんから見れば、大学の授業と同じように授業を受けたつもりでも、残念ながら大学のほうで、それをうまく吸収できていないと感じております。それは大学の課題だということにも感じますし、新しい学び方をどうやって大学に取り入れていくのか、あるいは、ある見識をもって取り入れないというのも正解なのかもしれませんが、そういうことを考えていく必要があると感じながら、きょうの話を聞いておりました。明るい未来だけではない話か

ら入ってしまいましたが、敢えて聞かせていただきました。

ちょうど区切りがいいようですので、会場からご質問やコメントがありましたら受けたいと思います。いかがでしょうか。



大川先生

大川：いくつかオンラインで質問が入っております。

重野：オンラインでどのような質問が入っていますか。

大川：単位のことについてとプラットフォームについて質問が入っております。『東大では、現在、edX と Coursera の両方を作っていますが、この二つを両立させていくのは、これからも継続されるのでしょうか？またはその二つのプラットフォームで、ラーナーとかコース設計などに違いがあるのでしょうか？』という質問があります。よろしくお願ひします。

重野：ちょうど私もその質問を考えていたところなのですが、プラットフォームについては、本日はその違いについてお話ができませんでした。東大では二つを併用されていますので、その辺の理由やコース、プラットフォームの違いなどがあるようでしたら、教えていただけますでしょうか。

藤本：国内から Coursera と edX と二大プラットフォームに参加しているのは東大だけなのですが、戦略的にはリソースの限られた状態で、二方面作戦をやるというのは非常にまずいので、本当はやらないほうがいいと思うのですが、何とかやりくりしながら、両方にコースを出しているというのが現状であります。

特徴としては、edX の方はオープンソースで edX のプラットフォームの開発を立ち上げられるようになっていきます。東大もオープン edX という、オープンソースを使っ、独自のプラットフォームを提供しています。それを世界各国がやっいて、オープンソースのカルチャーでどんどんアップデートするというアプローチでやっいてます。非常に良くできているところもあれば、少し不出来な感じのところもあるというのが、edX プラットフォームの特徴です。



藤本先生

一方、Coursera は、シリコンバレーの資本が入って、スタンフォードの教授たちが中心になって立ち上げましたので、最近は大学というよりも、プラットフォーム会社のような形で運営されているような状況があります。非常にプラットフォームが洗練されていますし、相互評価レポートなども、Coursera のほうが使いやすいところがあります。FutureLearn も先ほど先生がおっしゃったように、ソーシャルラーニングをかなり意識しているプラットフォームで、そこが edX や Coursera との大きな違いだと感じます。実は私、FutureLearn から東大にオファーがあったときに検討する立場にいました。世界の主要な三つ MOOC プラットフォームの管理画面にアクセスしたのは、多分日本で私だけではないかとちょっと自慢なのですが、あまりにマニアック過ぎて、誰もそのありがたみを分かってくれません。

大川：ありがたいです。

重野：ありがとうございます。プラットフォームで悩んだら、藤本先生のところにご相談に行くといいのではないかと思います。他に何かありますでしょうか。

森：はい、FutureLearn のステップという考え方ですが、すごく素敵だと思います。きょう、この会場に来るときに、その階段のところ、3 歳ぐらいのお子さんがいて、頑張って階段を上っていたのです。ああ、上った、上った、上ったと見ていたのですが、上り終えたときお母さんに、大きな声で「上れた！」と叫んでおりました。やはりこのステップという考え方は、非常に達成感があつていいなと思いました。僕の大学の東工大は edX のプラットフォームです。

大川：実は、森先生とは FutureLearn のデザインワークショップを一緒に香港で受けたことがあります。

森：はい。

大川：edX と FutureLearn の両方とも何となく知っておりますが、やはり人材なのではないかと思うのですが…。

森：そうですね。そういった意味では、edX は何というか、すごく、シンプルでいろいろできますので、汎用性のあるような、

いわゆる通常のラーニングマネジメントシステムに近いように思います。FutureLearn のワークショップを受けた僕自身の感覚では、やはり、教育的なことを踏まえて作られているというのを感じました。先ほどのステップの話もそうですが。

重野：はい、ありがとうございます。少し教育の話に戻したいと思うのですが、新しい可能性として、ブレンディッドラーニングという言葉も出てきています。また、MOOC そのものの効果と言えるかどうか分かりませんが、TA さんにとって非常に学習効果が高いというのも、意外でした。オンラインの世界だけ見ていると分からないような話なのですが、まだ単位にはならない新しい学びの MOOC はいかがでしょうか。

森：私は所属している教育革新センターのほうで、学内の先生方向けのセミナーをたくさんやっているのですが、ブレンディッド型の授業をお勧めしています。つまりクォーターになっているのですが、1 週間に 2 回授業があるときに、風邪を引いてしまったら、2 回参加できないことになってしまいます。オンラインで 1 回やって、もう 1 回は集まるという形でできるような、そんな授業の設計の仕方や教材の製作などを、センターのほうでも推進しているところで、このように、MOOC を少し学内利用でき

るように、ブレンディッドのお勧めもしています。



重野先生

つまり、MOOC 用に設定するというよりは、既存の大学の講義等に連動させたり、連結させたりするということですね。特に学内利用からすると、ある講義を取ると、オンラインコースがその教材の位置付けになっていて、単位は学校の授業で取ると。その教材の一つとして、MOOC の教材が位置付けられるというような形で、お互いにブレンドされていくという感じでしょうか。

森：そうですね、どちらかというオンラインの教材としての MOOC のコースというよりは、おっしゃられたように、その教材の一つとして授業の中で活用していくというような意味です。

重野：なるほど、分かりました。ありがとうございます。

大川：質問してよろしいでしょうか。週 2 回のうち、1 回オンライン、1 回教室というのは、週 2 回教えたことになるのですか。

森：まだ、それは…。

大川：交渉中ですか？

森：そうです。その方向で交渉中です。もちろんそのために、きちんとフォローをするような体制を整えなければいけないということが、文科省の大学設置基準上決められていますから、そういった形でサポートをいたします。オンラインもうまく混ぜて使うことを、今、学内で先生方に話しているところです。

大川：それ絶対、制度化したいです。許していただきたいと思っているのですが、大学連合で実現するというのはいかがですか。

重野：はい、藤本先生、新しい教育の形という意味ではいかがですか？

藤本：まだ、国内大学がそこまで行きついていないだけで、MOOC は海外の需要を見ると非常に前向きな状況になっています。いくつか例を挙げると、MOOC のフルオンラインだけで取れる修士課程も、すでに各大学が立ち上げていますし、イリノイ大学が先

駆けてオンライン MBA を始めました。イリノイ大学の MBA はそんなに上位ではなかったのですが、MOOC を出したことで評判になってランキングが上がったという話もありました。それから単位互換という観点では、edX にはマイクロマスターズという制度がありまして、それは修士課程で入学したときに MOOC を先に受講していれば、それが単位として認定されるという仕組みです。MIT を中心に、オーストラリアなど各国の大学が連合して、MIT の MOOC を取ったら、大学院に入るときに単位として認めるというようなことは既に起きているのです。そういうことを日本の大学がどこまで頑張つてやるかというところが、これからの課題だと思います。

重野：ありがとうございます。うまく話を広げられなかったのですが、その点に少し言及したかったのです。きょうの私の質問は、日本の大学の都合のようなどころから出発しているのですが、世界で見ると MOOC の使い方というのが、われわれ日本の大学の常識を越えているところがあり、やはり世界に目を向ける必要があると思います。まさに今コメントいただいたようなところが重要になってくると思います。大川先生、何かございますか？

大川：そうですね、FutureLearn の中でも、フルマスターコースもありますし、マイクロデシタルと最近いわれている、もっと小さい単位でバッジのようなものを取っておいて、集めて学位にするというようなものも、既に始まっています。もう少し言いますと、自分の大学のコースではなくて、他の大学の MOOC のコースを自分の大学の単位として認めるという大学間連携も進んでいます。例えば、A 大学のコースがすごくいいので、B 大学でそれを再認定するから受けていいよというようなことです。細かい単位で取り、単位ということでオフィシャルであり、かつ学位にもつながり、かつ一つの大学の授業だけを受ける必要もないというような状況は、既に起きています。

重野：ありがとうございます。まだまだ議論が足りないところはあるのですが、お時間が来てしまいました。

私が最後に少し申し上げたいのは、やはり様々な大学の制度や規則の制約を、どうしても受けてしまうと考えています。それは何か理由があるから、そういう制度ができていくわけなのですが、新しい技術、新しい学び方ということが出てきたときに、それに対応していく必要があるのだろーと思っと思っています。少し奥歯にものが挟まった言い方になるのは、今の制度のままでは駄

目なのだということも、含まれていると思うからです。先ほどの単位の話もそうですし、授業の置き方の話もそうです。でも、それは徐々に変わってくると思いますし、また必要ところは変えていかなければいけないと思います。こういう取り組みは、ますます進んでいくといいのではないかと思っしながら、きょうはお話を伺ってありがとうございました。

それでは最後に講師の皆さんから一言ずついただきまして、セッションを終わりにしたいと思っと思います。それでは森先生からお願っいたします。

森：次の 5 年後にどういうことが起っしているのかということにすごく興味があります。少なくとも今、大学に入ってくる学生さんたちは、子どものときからオンラインに慣れていますし、小中高とオンラインで授業をたくさん受けてきていますので、それを大学で受けられないという状況は、学生さんにとっては少々違和感があることなのかもしれません。そういう状況も見据えて、環境をつくってあげればいいのかと思っと思います。

重野：ありがとうございます。藤本先生いかがでしょうか。



藤本：はい、学習者の観点からいくと、きょう何度も話題になりましたが、実質的にはどの分野でも無料で、様々なコンテンツから学ぶことができるようになったと思います。少しお金を足せば、学位まで取れるようになりましてし、アメリカなどでも、非常に学費が上がっている現状の中で、やはり学費を抑えて教育を広く人に伝えていくという観点は、提供者側としてもっと考えていくべきだと思います。今の大学制度に縛られて、これはできませんということが、日本の大学にはあまりにも多いので、せつかくのチャンスですから、もっと先駆的にできればいいと常々思いながら、学内でのややこしいものと戦いながら活動をしています。今後も継続性ということを考えると、学内の問題というのはあるのですが、やはり価値を見いだしてもらうためには、継続的にその価値を伝えていく必要があると思いました。今日のこのような機会に参加させていただき、非常に感謝しております。ありがとうございました。

重野：ありがとうございます。最後に大川先生、お願いします。

大川：はい。5年10年、考えていきたいというのは、本当にまさにそうだなと思います。教室を完全に否定するという事は全く考えてないのですが、私たちはそう見られてしまうところがあります。今後、教室の価値は上がると思うのです。だから、オンラインと一緒に、あうときは何をするのか、あわないときは何をするのかということを中心に考えながら、新しいデザインを教員たちが作れるようになると、社会は変わるのではないかと思います。大学間で相互に協力したいと思いました。

重野：本日は誠にありがとうございました。私の質問から、暗い話題が先行してしまいましたが、最後には明るい話題になりました。とはいえ、皆さま、まだまだ戦っていかれるフェーズなのだと思いますので、ぜひ、関係各所で、ご検討をいただきたいと思います。こういう取り組みは、DMCとしてだいぶ取り組んでまいりましたが、情報発信をいたしましたのは、実は今回が初めてでございます。これを機会にいろいろな形で連携したり、情報交換をしたりということができたらと思っております。講師の皆さんはもちろん、会場の皆さまともそのような関係になっていければ、素晴らしい

ことだと思っております。それでは若干お時間が延びましたが、シンポジウムの最初のパネルセッションをこれにて終わりにしたいと思います。ありがとうございました。